

『教授』の男性主人公に見られる女性的特質¹

文学研究科英文学専攻博士後期課程3年

橋本 千春

はじめに

シャーロット・ブロンテ (Charlotte Brontë, 1816-55) の『教授』 (*The Professor*, 1857) の評価は、当時から低いものがほとんどで、その欠点として主に次の二つがあげられている。一つは、他の作品の習作であるという見方であり、もう一つは、語り手である男性主人公ウィリアム・クリムズワース (William Crimsworth) が男性として十分に描かれていないというものである。しかし、『教授』はシャーロットが自身の長編小説の中で一番最初に執筆した作品であることを考えるのであるならば、私達は『教授』を独立した価値ある作品として捉えるべきであり、習作との見方をすべきではない。ウィリアムの性質にいわゆる女性らしい特質が見られるという批評家や研究者による指摘も、シャーロットが1849年3月1日²のジェイムズ・テイラー (James Taylor) に宛てた手紙の中の一文で、“When I write about women I am sure of my ground—in the other case, I am not so sure.”³と述べていることから、一見解決してしまうかのような錯覚に陥る。しかし、『教授』に描かれている男性はウィリアムの他にも存在しており、ハンズデン・ヨーク・ハンズデン (Hunsden Yorke Hunsden) の性質に見られる女性らしいと捉えられる特質を除いて考えるならば、他の男性登場人物の性質にも女性らしいと考えられる特質が多少なりとも見られなければ、つじつまが合わないのではないだろうか。そのように考える時、私は、男性主人公ウィリアムの性質に見られる女性らしいと捉えられる特質には、シャーロットの、男性を描く知識不足だけではなく、彼女による何らかの意図が隠されているのではないかと考えた。そして、ウィリアムが旅するそれぞれの舞台、イギリスX—の町、ブリュッセル、再びイギリス、で見られるウィリアムの言動に着目しながら、その意図を本稿で探っていきたい。

1. ヴィクトリア時代における中産階級の理想的な男性像と女性像

まず、ウィリアムの性質に見られる女性的と捉えられる特質に着目する前に、ウィリアムが属する階級を明らかにし、そのうえでウィリアムが属する階級における理想的な男性像と

女性像について述べていきたい。

ウィリアムは、貴族階級の母親と商人である中産階級の父親との間に次男として生まれている。ヴィクトリア時代における結婚では、たとえ女性が結婚相手の男性よりも上の階級に属していたとしても、下の階級の男性と結婚すれば、その女性の階級は結婚相手の男性と同じ階級に属することになり、女性が結婚前に所有していた財産も結婚後は全て夫のものとなった。よって、そのような両親の間に生まれたウィリアムは、のちに孤児となっているものの、元々は中産階級の男性であり、その階級の中で多少なりとも生きてきたウィリアムは、両親を亡くした後も依然として自身の言動の中で、中産階級の階級意識を見せている。そして、そのウィリアムが見せる階級意識からの言動には男らしい言動だけでなく、女性らしい言動までもが、つまり、当時理想とされていた中産階級の男性像、女性像に求められていたジェンダー・イデオロギーが見てとれる。では、ヴィクトリア時代において、中産階級における理想的男性像、女性像とはどのようなものだったのかについて踏まえておきたい。

当時、産業革命によって台頭してきた中産階級の男性は、沢山のお金を稼ぐことが出来るようになると、自分達の職場から離れた郊外に大きな屋敷を購入し、使用人を雇うことで、妻や娘を家業から手を引かせた。更に、息子がいれば、息子をパブリック・スクールに行かせ、そこで古典教養を学ばせたのである。一家の稼ぎ手である父親や夫、パブリック・スクールで古典教養を学ぶことのできる息子である男性は公的領域（外）に存在し、一方家事から解放された妻や娘、つまり女性は私的領域（家庭）に閉じ込められるという図式が出来上がっていく。つまり、この男女の分離領域は、ジョン・ラスキン（John Ruskin, 1819-1900）が、『胡麻と百合』（*Sesame and Lilies*, 1865）の第2部「女王の庭園」（“Lilies of Queens' Gardens”）の中で、“Generally, we are under an impression that a man's duties are public, and a woman's private.”⁴と述べていることと一致する。加えて、ラスキンは、男女の分離領域の中で男女がどうあるべきかについても同章の中でふれている。ラスキンによれば、前者とは、“The man's power is active, progressive, defensive.”⁵とあるように、全てのものから女性を守るべき人を意味し、一方、後者は、家庭の中で“Power to heal, to redeem, to guide, and to guard.”⁶とあるようなこれらの力を発揮して、“... as the centre of order, the balm of distress, and the mirror of beauty :”⁷として機能できる人であることを示している。つまり、ヴィクトリア時代、中産階級の理想的男性像とは、何に対しても果敢に挑戦する行為者で、家庭を守ることの出来る人であり、女性像とは、コヴェントリ・パトモア（Coventry Patmore, 1823-96）の長編詩「家庭の天使」（“Angel in the House,” 1854-62）に描かれているような、常に受身で自己犠牲や自己放棄の美德を持っているような人である。

これら中産階級の理想的男性像、女性像をふまえたうえで、ウィリアムの人生の舞台、イギリスX一の町、ブリュッセル、そして再びイギリス、という流れの中で見られる女性的と

捉えられる特質に着目していきたい。

2. イギリスX—の町

パブリックパブリック公的領域に存在することのできる男性主人公ウィリアムの人生の旅は、イギリスX—の町から始まっている。ウィリアムの外見は美男子でなく、痩せていて貧弱な体をしているが、年齢が10歳離れている堂々としていて力強いがっちりとした、機敏そうな体格の兄エドワード・クリムズワース (Edward Crimsworth) が経営する会社で、年90ポンドの給料で外国との通信を受け持つ次席事務員として働いている。ウィリアムは、イートン校の出身者である。パブリック・スクールの出身、つまり、それは知識は勿論のこと、道徳面においてもウィリアムは男性として紳士になるべく教育を受けてきたことを意味している。そして、実際、物語の中でもウィリアムのイートン校での教育の成果は、エドワードの会社で複数の言語を使うことのできる知性を発揮し、下宿先の女主人からは、“she answered that she believed I was a very religious man, and asked Tim, in her turn, if he thought I had any intention of going into the Church some day ; for, she said, she had had young curates to lodge in her house who were nothing equal to me for steadiness and quietness.” (55)⁸とあるように、その生活態度の立派さを見せている。また、エドワードの会社を辞める時にも、不当と思われるエドワードの侮辱的態度への反抗として、断固とした態度を示すなど男性としての言動が見られる。

しかし、一方で、ウィリアムの性質の中にいわゆる女性らしい特質も見られた。それは、ウィリアムが自分の人生の最初の職業を、“...such was the scorn expressed in Lord Tynedale's countenance as he pronounced the word *trade*—such the contemptuous sarcasm of his tone—that I [William] was instantly decided.” (40) とあるように、望んでもいない商人として生きることを感情によって決め、エドワードの会社で働いていることである。感情によって自分の人生の進むべき方向を決めてしまうウィリアムの言動は、アルフレッド・テニスン (Alfred Tennyson, 1809-92) が『プリンセス』 (*The Princess*, 1847) の第5部で “Man with the head and woman with the heart : ”⁹とうたっているように、またシンシア・イーグル・ラセット (Cynthia Eagle Russett) も『女性を捏造した男たち—ヴィクトリア時代の性差の科学』 (*Sexual Science : The Victorian Construction of Womanhood*) の中で “In men, intellect predominated over feeling ; in women, the reverse : ”¹⁰と述べていることから、ウィリアムが女性らしいと考えられる特質を持っている男性であることを示している。そして、感情によって物事を判断してしまう言動は、シャーロットの別の作品『シャーリー』 (*Shirley*, 1849) の第28章でも女性の象徴的思考回路の特徴として描かれている。それは、女性主人公の一人、シャーリー・キールドア (Shirley Keeldar) がポインター犬にかまれたことによって、狂犬病から死に至るかもしれないと想像、判断し、遺言状まで作ってしま

ったというものである。

また、ウィリアムの女性的と捉えられる言動が他にも見られる。それは、エドワードが経営する会社で、常に耐えながら働いていることである。ウィリアムは、イートン校の出身者であり、公的領域で働くことが出来る男性である。つまり、エドワードの会社で働くことが嫌であれば退職し、別の仕事に就けばいいことである。しかし、ウィリアムに見られる忍耐とは、自我を押し殺してまで耐えなければならなかった中産階級の女性達が強いられていた忍耐と同じであり、ウィリアムが物語の中で使用する言葉は、“cannot dream” (48)、“‘Perhaps I have no choice.’” (60)、“‘What can you do to alter it [your intolerable life]?’” (63) といった表現が目立つ。

加えて、ウィリアムがX一の町で友人として選んだ男性ハンズデンもウィリアムと同様女性的特徴を持った人物として描かれている。ハンズデンは、女性らしい顔の小ささと、黒くて長い巻き毛を持っている。ハンズデンの性質にはウィリアムの性質に見られるような、いわゆる女性的特質は目立っていないものの、ウィリアムの言葉に表れないメッセージを感知することの出来る感受性はそなえている。ウィリアムと言葉を交わさなくても、まるで会話が成り立っているかのように理解しあえていたり、ウィリアムが何か窮地に陥った時には、どこからともなくまるで救世主であるかのように物語の中に登場するなどウィリアムと目には見えない相互理解を成立させることのできる能力が見られる。それは、つまり、お互いが言葉ではなく、感覚によって感じあえることを意味しており、お互いが類似した存在であると考えられる。そして、そのようなウィリアムとハンズデンに見られる類似性は、テリー・イーグルトン (Terry Eagleton) が、“*alter ego*”¹¹と捉えているように、ハンズデンはウィリアムの分身であるといえる。そして、ハンズデンがウィリアムのもう一人の自分であると捉えるなら、ハンズデンのおせっかいを受け入れ会社を辞めていることも、またハンズデンのすすめで自分の次の人生の舞台をブリュッセルにすることを決め、即決でブリュッセルに行っているのも不自然ではない。また、ウィリアムが時々ハンズデンに対して不快に思うことはあるが、ハンズデンとの交流をずっと続けているのも、『教授』に描かれているウィリアム以外の男性の登場人物達の中で、ハンズデンだけが女性的特徴を持って描かれているのも、ハンズデンがウィリアムの分身であることを考えれば納得できる。

以上、X一の町でのウィリアムの言動には、男性的と女性的と捉えられる特質の両方を見ることができたが、どちらが多くウィリアムの性質の中に見られたかとなると、女性的と考えられる特質の方である。そして、ハンズデンはそのようなウィリアムを、中産階級の女性の生き方をイメージさせる “*automaton [automation]*” や “*fossil*” という単語を用いて、“‘just like an automaton [automation]’” (67) と言ったり、“‘I say, that when a man endures patiently what ought to be unendurable, he is a fossil.’” (68) と述べたりしてウィリアムをからかっている。

次に、これらウィリアムに見られた女性的と捉えられる特質が、ウィリアムの次の人生の舞台ブリュッセルとその後のイギリスではどうなっているのかについてみていきたい。

3. ブリュッセル、そして再びイギリス

エドワードの会社を辞め、ハンズデンの紹介状を持ちブリュッセルにやって来たウィリアムがまずしたことは、生きていくためのお金を稼ぐ仕事を見つけることであった。ウィリアムは、その仕事として教師という職を選んでいるが、今回はX一の町の時のように感情で決めるのではなく、頭脳で考え、決めている。そしてペレが経営する男子校で英語及びラテン語の教師として働き始める。

ペレは、ウィリアムが勤務している男子校の塾長で、顔立ちは気持ちよい程整っていて、知性もあり、外見的にはどこから見ても興味深い、好ましい40歳のフランス人男性として描かれている。しかし、その覆いの下には、“flint” (99) や “steel” (99) といったようなものを隠している。換言すると、表面的にはとてもいい人に見えるが、自分の考えはいつも心の奥底に隠していて、相手にそれを見せることはない。というのも、ウィリアムがペレの本心を知るのは、ペレの学校と隣接している女子寄宿学校の塾長ゾライード・リューテル (Zoraïde Reuter) とリューテルの学校の庭を夜遅く散歩している会話を偶然耳にした時であったり、ペレが酒で酔いつぶれている時に限定されているからである。ウィリアムは、ペレが経営する男子校において、生徒達によって辞任に追い込まれる教師達が多い中、持ち前の機転をきかせて生徒達を上手にコントロールし、いつも成功をおさめ、ペレからは、^{モン・フィス}わが息子と呼ばれる存在にまでなっている。

そして、そのようなペレの学校での教師としての評判がきっかけとなり、ウィリアムの男性性が本格的に始動するという機会が、リューテルによって与えられる。リューテルは、ウィリアムの教師としての能力に目をつけ、自分の経営する寄宿学校でも、英語の教師として働いて欲しいと彼女らしいやり方でウィリアムに提案を持ちかけてきたのである。ブリュッセルで、ペレから私室の一つを借りて住むことになった時、その部屋の閉じられた一つの窓の向こう側にあるエデンの園を何とかして見られないものかと奮闘していたところに、思いがけず知りたい世界が向こうからやってきたのである。ウィリアムにとっては、授業を媒体としてではあるものの、女性と直接関わり、知ることのできるまたとない機会の到来であり、よってリューテルの学校での英語の教師としての仕事を引き受ける。そして、女生徒達を目の前にした時には、“I did not bear the first view like a stoic ;” (113) とあるように、ウィリアムの男性性は動き始めている。とはいっても、X一の町にいた頃にも、ウィリアムは既に女性に関心はあった。それは、エドワードの屋敷で開かれたエドワードの誕生日会に招待された時、ウィリアムが、“I should have liked well enough to be introduced to some pleasing and intelligent girl, ...” (56) と述べていることからわかる。しかし、X一の町で

のウィリアムは、そう思っただけで、ハンズデンが、自分が踊りたいと思っていた女性を誘い、踊っていたような積極的行動は見られなかった。だが、ここブリュッセルで女生徒達と接する機会を得たことによって、ウィリアムの異性への接し方はX—の町の時に見られた女性達を眺めていただけとは違って、興味ある女性に自ら声をかけ、関わろうとする積極性が見られる。

しかし、ウィリアムの男性性の本格的始動と同時に、一方、ブリュッセルでもウィリアムの性質の中に女性らしさを感じさせる特質が見られる。それは、ウィリアムが女生徒達を見る視線からである。ウィリアムの女生徒達を見る視線は、まるで女性が女性を観察して、意見を述べているかのような印象を受ける。ウィリアムの視線は、例えばある女生徒については胸の輪郭の崩れ具合を見ていたり、また、違う女生徒については、コルセットが不具合に締め付けられているといった女性の下着に視線が注がれていたりする。それから唇よりも歯並びを見ていることや、髪の毛についても、髪が一分の隙もなくすきあげられ、編み上げ油で塗り固められているといったような視線が女生徒達に投げかけられている。このようなウィリアムによる女生徒達へ投げかけられた視線においては、女性らしいと捉えられる特質が見られないペレが、リューテルの顔や顔立ち、笑顔、口元といったいわゆる女性の体の曲線に注目していることを考えるなら、男性の視線としては違和感がある。

ウィリアムは、リューテルの学校で女生徒達と授業を通して関係を持つことによって、女性という生き物が“Something vague, slight, gauzy, glittering ; now when I came in contact with it I found it to be a palpable substance enough ; very hard, too, sometimes, and often heavy ; there was metal in it, both lead and iron.” (126) であったことを知っていく。ウィリアムがブリュッセルでひかれた女性は、最初リューテルであり、次に助教師兼ウィリアムの授業の生徒であり、イギリスとスイスの血を受け継ぐフランシス・エヴァンズ・アンリ (Frances Evans Henri) である。ウィリアムが魅力を感じる女性とは、“In sunshine, in prosperity, the flowers [women] are very well ; but how many wet days are there in life — November seasons of disaster, when a man’s hearth and home would be cold indeed, without the clear, cheering gleam of intellect.” (46) とあるように、知性を持っていなければならないのだが、彼女達二人はその知性を持っている。

リューテルは、32歳の色白でふっくらした体つき、栗色の巻き毛、富の象徴としてのガーネットの指輪を身につけ、すばらしい気配り、分別、落ち着き、自己抑制を持ち、監視と手のうちを見せない用心深い話し方で、自分の学校にいる全ての生徒と教師をコントロールしていた。しかし、ウィリアムだけは例外でコントロールするのに苦戦していた。リューテルは、ウィリアム以外の男性教師達は完全にコントロールできていたのに、何故ウィリアムだけコントロールするのに苦戦していたのか、それは、ウィリアムの性質の中に女性らしいと捉えられる特質があったからであると考えられる。

リューテルは、さまざまなテストをウィリアムに試した結果、ウィリアムの体調が悪い日に優しく接したことによってウィリアムの心をつかむことに成功する。女性に免疫のないウィリアムは、リューテルの優しい配慮ある言動に魅了され、彼女に対する気持ちが興味から恋心へと変化するのだが、ある夜リューテルがペレと婚約していたことを知り、同時に自分への興味を持っていなく、どうしたら自分をコントロールできるかと模索していたというリューテルの本心を知ると、彼女への恋心は、消滅し彼女に対し冷たい態度を取るようになる。しかし、このウィリアムのリューテルへの非情な態度が、マゾヒストである彼女の心を逆にウィリアムへとひきつける皮肉な結果を生んでいる。

ウィリアムは、“I had ever hated a tyrant ; and, behold, the possession of a slave, self-given, went near to transform me into what I abhorred !” (211) とあるように昔から専制君主を嫌い、リューテルによってもう少して自分が嫌っていた存在になりかけそうであった。専制君主とは、換言すれば、人の上に立つ圧制者を意味し、それを家庭内に置き換えるなら、家父長的に振舞う男性となる。ウィリアムは女性との関係において、自分と“equal” (137) であることや自分が“idol[ize]” (137) できる女性、また“living ardour” (144) を持っていることを望んでいた。そのため、知性があり、塾長として自立している女性であるものの、男女の関係で自分を専制君主的立場に置こうとし、生きた感情、つまり「動」よりも「静」の言動が目立つリューテルをウィリアムが愛することはない。

ウィリアムは、リューテルへの恋心が冷めると、別の女性フランシスに興味を抱き始める。フランシスは、ウィリアムが働いているリューテルの学校でレース直しやちょっとした針仕事と手芸を教える助教師として勤務しながらも、同時にウィリアムの英語の授業も生徒として受けていた。美人ではないが、体つきはほっそりとしていて、境遇はウィリアムと同じ孤児であり、スイス人で牧師の父親とイギリス人の母親が生きていた頃、自然と身につけたであろう中産階級的美徳の根気と義務感を持っている。根気は、生徒として英語を勉強することに使われ、義務感も生徒を教える助教師としての仕事に向けられていた。

ウィリアムがフランシスに興味を持ち始めたのは、フランシスの知性を授業内で知ったことがきっかけとなっているが、女生徒達との授業を介してのやりとりやリューテルとの関係の中で女性に臆することなく接することのできるようになったウィリアムは、教師という立場を利用して関心を抱いていたフランシスへと近づいていく。その方法とは、授業後いつも、“‘Your book an instant.’” (166) という短い言葉で会話を始め、周囲を気にせず大胆にフランシスに近づき彼女の帳面を取り上げ、個人的に勉強を見ることで、共に時間を過ごすというものであった。そして、このウィリアムの恐れを知らない度胸ある言動は、X一の町にいた時、ハンズデンから、“‘You’re not bold and venturesome enough...’” (70) と言われ、男性としての大胆さと判断力の欠如の指摘をされていた。前者は、フランシスに声をかけ彼女の勉強を見ながら一緒に時を過ごすことによって、そして、後者は、フランシスがおぼの

看病をしなければならず、リューテルに強制的に解雇された時のリューテルの汚いやり方を
知った時、自らの決断力であっさりリューテルの学校の職を辞めることによって打開して
いる。また、ペレがリューテルと結婚することになり、今後のウィリアムの住居と仕事につ
いてペレから好意的に持ち出された提案に対しても、自分がどういう行動を取るのが一番い
いのかよく熟考した後で断るといふ姿勢をみせている。

ウィリアムは、教師と生徒という立場でフランシスと個人的に接していく中で、フランシ
スの中に知性は勿論のこと、沈黙の「静」と一度あふれ出すと感情を爆発的に見せる、リュ
ューテルにはなかった「動」の部分を隠し持っていったことを発見する。そして、このフラン
シスに見られた“the more dangerous flame burned safely” (196) とある「動」の部分に
ウィリアムは魅力を感じ、フランシスがウィリアムにとっての“my ideal of the shrine”
(195) となっているが、このような女性にフランシスになることが出来たのはウィリアム
の教育によるおかげであり、ウィリアムが自分の理想とする女性に育て上げたとも考えられ
る。しかし、同時に、フランシスの側にも自分がこうありたいという願望がなければ難しか
ったことだとも考えられるだろう。その後、無職であったウィリアムは、ある男子生徒の父
親であるヴァンデンフーテン (M. Vandenhuten) の紹介によって新たな教師の職を得て、
フランシスへプロポーズを試み、成功させている。

ブリュッセルで見られるウィリアムの言動には、冷静な言動、フランシスへのプロポーズ
とその成功等、明らかに男性らしいと考えられる言動の方が目立っていた。そして、プロポ
ーズを成功させたのちにウィリアムは、人生で二度目のヒポコンドリアにかかっているが、
ウィリアム自身、何故ヒポコンドリアにかかったのかその理由がわかっていないし、物語の
中でもその原因については述べられていない。最初にウィリアムがヒポコンドリアにかかっ
たのは、少年時代の時であり、その頃ウィリアムは、両親を亡くして、行く手を見失い、多
くの愛情を持ちながらも向けるべき対象はほとんどなかったし、また、燃えるような憧れに
対しての暗い将来、強い欲望に対しても僅かな希望しかなかったためになったとウィリアム
自身が述べている。しかし、今回は自分が好む種類の理論と観念を使うことの出来る教師の
仕事に就き、愛する女性も手に入れたのに何故かヒポコンドリアにかかり、かかった原因に
頭を悩ませているが、私は、少年時代の頃とは違う次元でありながらも、同じような将来に
対する不安が原因なのではないかと考える。家庭を守ることが中産階級の男性における美德
とされていた当時、中産階級の階級意識を持っていたウィリアムも、男性として自身の中
にある男性性の発達に伴い、共にフランシスと家庭を築くところまで到達したが、いざこれか
ら自分が男性として家庭を守らなければならず、自分の人生だけではなく相手の人生までも
責任を持つことになろうとした時、その負うべき責任の重さがウィリアムにおそろしいも
のとしてのしかかったために、ヒポコンドリアになってしまったのではないだろうか。しか
し、ウィリアムは二週間後、わずらっていたヒポコンドリアを無事に克服すると、フランシ

スとの結婚式を済ませ質素な結婚生活をブリュッセルで始めている様子が描かれている。

彼らの結婚生活とは、共に働くという、いわゆる現代的な結婚生活である。^{エンジェル・イン・ザ・ハウス}家庭の天使であることが、中産階級の女性の理想と考えられていたヴィクトリア時代に、プロポーズを受け入れた後、夫であるウィリアムに向かって、“I must be no incumbrance to you—no burden in any way.” (250)、“‘... I like an active life better ; I must act in some way, and act with you.’” (251) と述べ、リューテルの学校を解雇された後に、ある夫人の紹介で手に入れた教師の仕事続ける許可をウィリアムから得て、ウィリアムと同様一人の教師として一生懸命に働く姿は、異質な、野心ある女性として描かれている。一方ウィリアムはというと、そのようなフランシスの活動的言動を見守っているにすぎず、フランシスから持ち出された提案に対していつも、“‘... you shall have your own way, for it is the best way.’” (251) という態度で接しているにすぎない。それは、ウィリアムが、女性の野心や女性の社会進出に協力的な理解ある夫であることを意味しているが、言い換えれば、ウィリアムの家庭内での権力が名前だけになっていることを示している。そして、その後もフランシスの向上心は途絶えることなく突き進んでいて、最終的にフランシスが求めた生き方とは、塾を開いて、そこの塾長として働きながらも、結婚三年後に彼らの間に生まれた息子ヴィクター (Victor) の世話も同時にこなすことであった。ウィリアムは、そのようなフランシスのことを、“..., I seemed to possess two wives.” (273) と見ているが、それはまるで妻であり、母でもあり、権力者でもあったヴィクトリア女王 (Queen Victoria) とその夫であるアルバート (Albert) との関係^{セバレイト・スフィアーズ}をイメージさせ、男女の分離領域が逆になったかのような印象を受ける。

フランシスの言動に見られる活発さは、ウィリアムが家庭を手に入れた時点で高い志を持つことをやめてしまったこととは対照的で、ウィリアムに表現しつくされていない向上心をフランシスが取って代わっているかのようなのである。つまり、それは、シャーロットが、男性が家庭の中で権力を持ちすぎることへの疑念と女性にも向上心や力強さが男性と同様に備わっていること、そして、ウィリアムとフランシスのような家庭こそがシャーロットが望む男女の形であることを強調して描きたかったために生じさせたことではないだろうか。『教授』の中には、ウィリアムとフランシスの家庭以外にも、エドワードが築きあげた家庭とペレとリューテルの家庭の描写もあるが、家父長的男性であるエドワードと家庭の天使像^{エンジェル・イン・ザ・ハウス}をイメージさせるような女性である妻の結婚生活は、エドワードの会社の破産と共に一度崩壊しているし、ペレとリューテルの夫婦仲は微妙であり、愛情の行き違いがあることがハンズデンによってウィリアムに告げられている。

ウィリアムに見られた女性的と捉えられる特質は、ブリュッセルでウィリアムが家庭を手に入れた以後、そのような描写はウィリアムには見られないものの、彼らがブリュッセルを去ってイギリスへやってきてからは、“he has a susceptibility to pleasurable sensations

almost too keen, for it amounts to enthusiasm.” (286) とあるように息子ヴィクターに受け継がれている。ヴィクターは、感受性の強い男の子として描かれ、何かあるとまず爆発的に自分の感情を述べてから、理由を尋ねるという行動を取っているし、また、ウィリアムと同じイトン校に行くことが決まっている。つまり、それは、ウィリアムの性質に見られた、いわゆる女性らしい特質の全てを受け継いだとはいわないまでも、ウィリアムと同じような人生の道をたどるかもしれないことが示唆されている。すなわち、それは、シャーロットがウィリアムのようないわゆる女性らしい性質を持った男性の生き方を肯定的にみていることを意味していると考えられる。

おわりに

ウィリアムの性質に見られた女性的と考えられる特質は、彼の人生の旅、イギリスX一の町、ブリュッセル、再びイギリス、の過程の中で徐々に少なくなり、ブリュッセルで家庭を持った後では消えていて、それ以後はヴィクターに受け継がれていた。そして、ウィリアムが築いた家庭とは、エドワードやペレの家庭とは違って、男性が女性の野心、向上心、社会進出を見守り、愛情に満ち溢れている家庭であった。

『教授』において、語り手が男性である理由は一般的には石塚虎雄氏が『ブロンテ姉妹論』の中で述べているように、次のように考えられている傾向がある。それは、第1にはAngriaでは男性がnarratorであったので自然に男性をnarratorにしたということが考えられる。次にCharlotteは1846年5月の第3週に姉妹の詩と一緒に詩集を出したが、その時のペンネームもCurrer Bellという男性名であった。これは女性であると思われることを嫌ったためである。1837年3月の彼女へのRobert Southeyの手紙にも見られるように、女性の作家が一般社会からも批評家からも偏見をもって見られることを恐れたからの措置であるが、Charlotteはこの*The Professor*でもCurrer Bellのペンネームを使っており、そのため男性のnarratorの方が自然であったのである。第3にはこの小説の素材にはCharlotte自身の身近かな、そして最近のHeger及びHeger夫人との経験があるのであって、そのことから彼女は出来るだけdetachした地点にいたいと考えたが、それには女のnarratorよりも男のそれの方が有利だと考えたのだ、と思う。CharlotteはHegerへの1845年1月8日の手紙で、多くの愛情などは少しも望まない。ささやかな友情でよいからそれを得たいと言い、5月18日も手紙を出しているが、伴しそれは現在残っていない。11月18日に最後の手紙を出して、先生自身のことや学校のこと等の消息を知らせてほしいと言っている。Hegerからは手紙は来ず、そしてこのHegerとの問題にHeger夫人が深くかかわっているのである。従ってCharlotteはそれが素材になっているこの小説で、出来るだけそこからdetachした地点に自らを置くには男のnarratorが良いと考えたのだ、と思う。第4の理由としては、男性の方が一般的には女性よりも感情的でなくて冷静であると考え、この小説のnarratorに適しているとCharlotteは

考えたのだろう、と思う。¹² 確かに、このような見方もできる。

しかし、ウィリアムに見られる女性的と考えられる特質に着目して物語を見るならば、シャーロットが『教授』で描きたかった世界とは、ヴィクトリア時代のジェンダー・イデオロギーの枠にとらわれない男女のあり方であり、その枠から外れたいわゆる女性らしい特質を持った男性を主人公とすることで、シャーロットは新しい男性像を社会に提示することを試みたとは考えられないだろうか。

彼女を作家として一躍有名にした最初の出版作品『ジェイン・エア』(*Jane Eyre*, 1847)の中においてもそのような傾向は、違った形の表現方法で表されている。女性主人公ジェイン・エア (*Jane Eyre*) の夫となったジェントリー階級の家父長的男性として描かれているロチェスター (*Rochester*) は、物語の最後では失った視力を片方回復させているとはいえ、屋敷の火事によってひと時、片手と視力を失っており、ジェインの手助けなくては生活が困難となっている。つまり、それは、シャーロットが望む男女の姿というのが、『ジェイン・エア』以前の『教授』執筆当初から、すでにはっきりとしていたことを表している証拠ではないだろうか。すなわち、シャーロットの求める男性像とは、女性を対等に扱う、当時のジェンダー・イデオロギーの枠に相当しない男性であることが明瞭に示されているといえるだろう。それ故、私は、ウィリアムに見られたいわゆる女性的特質は、ある意味で、シャーロットによる当時の社会に対する挑戦であったのではないかと考える。

注

¹ 本稿は、大学院英文学専攻課程協議会第43回研究発表会(2009年11月21日(土) 於:上智大学)にて口頭発表したものを、加筆、修正したものである。

² 日付の後の?は、手紙の原文タイトル、“To James Taylor,” [? 1 March 1849] にしたがったものである。(Charlotte Brontë, “To James Taylor,” [? 1 March 1849], *The Letters of Charlotte Brontë with a selection of letters by family and friends*, ed. Margaret Smith, vol. 2 (Oxford: Clarendon P, 2000) 188.)

³ Charlotte Brontë, “To James Taylor,” [? 1 March 1849], *The Letters of Charlotte Brontë with a selection of letters by family and friends*, ed. Margaret Smith, vol. 2 (Oxford: Clarendon P, 2000) 188.

⁴ John Ruskin, “Lilies of Queens’ Gardens,” *Sesame and Lilies* (1865; United States: Indy Publish, 2002) 50.

⁵ *ibid.*, 40.

⁶ *ibid.*, 51.

⁷ *ibid.*, 50.

⁸ *The Professor*の引用はCharlotte Brontë, *The Professor*, ed. Heather Glen (1857; London: Penguin Classics, 2003) に拠り、該当ページは括弧で記す。

⁹ Alfred Lord Tennyson, “The Princess,” 1847. *The Works of Alfred Lord Tennyson*, ed. Karen Hodder (1994; London: Wordsworth Poetry Library, 2008) 281.

¹⁰ Cynthia Eagle Russett, *Sexual Science : The Victorian Construction of Womanhood* (Cambridge Harvard UP, 1989) 18.

¹¹ Terry Eagleton. "The Professor," *Myths of Power : A Marxist Study of the Brontës* (1975 ; London : Palgrave Macmillan, 2005) 35.

¹² 石塚虎雄 『ブロンテ姉妹論』 1982年 東京 篠崎書林 1984年 52-3頁 尚、読点(,)は、石塚虎雄氏の原文にしたがったものである。

参考文献

Arnstein, Walter L. *Queen Victoria*. Houndmills : Palgrave Macmillan, 2003.

Brontë, Charlotte. *Jane Eyre*. 1847. Ed. Stevie Davies. London. Penguin Classics, 2006.

---. *Shirley*. 1849. Ed. Jessica Cox. London. Penguin Classics, 2006.

---. *The Letters of Charlotte Brontë with a selection of letters by family and friends*. Ed. Margaret Smith. Vol. 2. Oxford : Clarendon P, 2000. 187-8.

---. *The Professor*. 1857. Ed. Heather Glen. London : Penguin Classics, 2003.

Eagleton, Terry. *Myths of Power : A Marxist Study of the Brontës*. 1975. London : Palgrave Macmillan, 2005.

Ed. Allott, Miriam. *The Brontës : The Critical Heritage*. London : Routledge & Kegan Paul Ltd, 1974.

Ed. McNees, Eleanor. *The Brontë Sisters Critical Assessments*, Vol. 4. East Sussex : Helm Information Ltd, 1997.

Patmore, Coventry. *Angel In The House*. 1854-62. The United States : Kessinger Publishing, 2004.

Ruskin, John. "Lilies of Queens' Gardens." *Sesame and Lilies*. 1865. United States : Indy Publish, 2002. 32-55.

Russett, Cynthia Eagle. *Sexual Science : The Victorian Construction of Womanhood*. Cambridge : Harvard UP, 1989.

Smiles, Samuel. *Self-Help*. 1859. Ed. Peter W. Sinnema. Oxford : Oxford UP, 2002.

Tennyson, Alfred Lord. "The Princess." 1847. *The Works of Alfred Lord Tennyson*. Ed. Karen Hodder. 1994. London : Wordsworth Poetry Library, 2008. 223-303.

池田良三 『イギリス教育の伝統と未来』 東京 帝国地方行政学会 1971年

石塚虎雄 『ブロンテ姉妹論』 1982年 東京 篠崎書林 1984年 52-3頁

シンシア・イーグル・ラセット著 上野直子 訳 富山太佳夫 解題 『女性を捏造した男たち—ヴィクトリア時代の性差の科学』 東京 工作舎 1994年

杉村藍 「*The Professor*と初期批評」『名古屋女子大学紀要 (人文・社会編)』第49号 名古屋 2003年 255-67頁

多賀太 『男性のジェンダー形成—〈男らしさ〉の揺らぎのなかで—』 東京 東洋館出版社
2001年

渡千鶴子 「『教授』—出版拒否の理由を探る—」『ザルツブルグの小枝』 柳五郎編著 大阪
大阪教育図書 2007年 177-88頁

The Feminine Characteristics in the Hero of *The Professor*

HASHIMOTO, Chiharu

The Professor (written in 1847 and published posthumously in 1857) by Charlotte Brontë (1816-55) has been considered to be a low-grade novel by many critics. As for the reasons, there are mainly two faults. One reason is that *The Professor* seems to be a warm-up for her other three novels, *Jane Eyre* (1847), *Shirley* (1849), and *Villette* (1853). The other reason is that the hero, William Crimsworth, has been described as not a male enough. However, I think that *The Professor* should be treated as one of Brontë's valuable works. To be sure, Brontë herself spoke about male characters in her letter to James Taylor of May 1, 1849: "When I write about women I am sure of my ground—in the other case, I am not so sure." However, I became aware that the feminine characteristics that William has are not seen in other male characters except Hunsden Yorke Hunsden. Therefore, I think that maybe Brontë gave William feminine characteristics for some special reason. I will examine Brontë's intention behind William's feminine characteristics in this paper, focusing on his deeds at each place to which he journeyed (at X— England, Brussels, and England again).